

経 済 情 勢

国 内

輸出の続伸と製品在庫調整の一巡に加え、季節商品の売上げ好調もあって、生産、出荷は大幅に増加し、商品市況も引続き堅調に推移したが、国内最終需要は依然盛り上がりを欠いている。

輸出は、中南米、アフリカ向けが低迷を続けているものの、米国向けが一段と伸長したほか、EC、東南アジア、中国向けも増加を続けている。設備投資は、一部に若干の動意がうかがわれるが、全体としては依然足踏みの域を脱していない。また公共事業契約額や住宅着工戸数は引続き前年を下回る水準にとどまっている。個人消費関連では、乗用車やVTR等が堅調に推移したほか、百貨店売上げも緩やかな伸びを続けている。

9月の商品市況をみると、輸出の伸長や在庫調整の進捗から、鉄鋼、石油製品、石化製品、板紙、繊維等多くの品目で上昇した。一方、9月の卸売物価は、為替円高から輸出物価、輸入物価がともに低下したものの、加工食品、鉄鋼等が値上りしたため総合では微騰となった。また消費者物価(東京)は、秋冬物高値衣料の出回り、ガソリン等の値上りから上昇したが、前年比では落ち着いた動きにとどまっている。

金融面をみると、8月のマネーサプライ前年比伸び率は前月に続き低下した。また銀行貸出約定平均金利は、資金需要の落ち着きを背景に低下傾向を持続した。この間、9月の公社債市況は、米国金利先高感の後退や、国債組入れ金融商品の発売等による需給地合いの好転から、ほぼ通月強調裡に推移した。

8月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、輸出の好伸を主に引続き大幅な黒字を計上した。一方長期資本収支は、外国資本の流入が低調にとどまったため、前月を上回る赤字となった。9月の円相場(対米ドル直物相場)は、米国金利先高感の後退を背景に、月中を通じて堅調に推移した。

生産、出荷は著伸

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)、同出荷(速報)は、前月一

服のあとそれぞれ+2.8%、+5.3%と大幅に増加した(前年比は+5.2%、+7.3%)。

* 以下増減率はとくに断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別動向をみると、資本財輸送機械の生産が前月に続き減少したほかは、各財の生産、出荷とも軒並み増加した。中でも生産財が輸出の好調(鋼材、セメント)や加工メーカー筋の手当て増大(石化製品、亜鉛、板紙)から生産、出荷とも引続きかなり増加したほか、非耐久消費財(衣料)、一般資本財(土建機械、金属加工機械)の生産、出荷がともに大幅増加となり、また耐久消費財(エアコン)の出荷も前月に続き増加した。この間、生産者製品在庫(速報)は前月微増のあと-2.1%と大きく減少し、製品在庫率も大幅に低下してほぼ3年振りの低水準となった。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、8月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は前月減少のあと+8.5%と再び増加した。また、建設工事受注額(民間分、速報)も、前月減少のあと+3.0%となった。

8月の公共事業契約額(前年比)は、-12.0%と引続き前年水準を下回った(前月-18.0%)。

8月の住宅着工戸数(前年比、速報)は、民間資金分が貸家、分譲を中心に伸びを高めたものの、公的資金分が依然低水準にとどまったため、全体では-1.7%と6ヵ月連続して前年水準を下回った(前月-3.4%)

個人消費関係では、8月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、季節商品を中心に+1.7%(前月+3.7%)の伸びとなった。9月入り後の都内百貨店売上高も緩やかな伸びを続けた模様である。9月の耐久消費財の売行きをみると、VTRが引続き好伸したほか、乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)も、新車種の売行き順調から+5.8%とかなりの伸び(前月+13.2%)となったが、その他の財は総じて伸びが鈍化した。

雇用動向をみると、8月の所定外労働時間は製造業を中心に+0.2%と6ヵ月連続して増加したが、常用雇用(+0.2%、前月-0.1%)、有効求人倍率(0.58倍、前月0.57倍)は一進一退を続けている。この間完全失業率は、前3ヵ月低下のあと労働力化率の上昇から2.80%と大幅に上昇した(前月2.51%)。

商品市況は続伸

9月の商品市況をみると、非鉄(銅、アルミ)、建材(生コン)が海外市況の反落や実需不振から低下したものの、鉄鋼(形鋼)、繊維(アクリル、綿糸)が輸出好調や在庫調整一巡から続伸したほか、食料品(砂糖、大豆)も海外市況の続騰を映じ

て引続き上昇、また石油製品、石化製品、紙(板紙)等もユーザー筋の在庫補充等から上昇するなど、全体としてかなりの続伸となった。

9月の卸売物価は、輸出物価、輸入物価がともに為替円高から低下に転じたものの、国内物価が加工食品、鉄鋼の値上り等から上昇したため、総合では+0.1%の微騰となった(前年比-3.2%)。

9月の消費者物価(東京、速報)は、秋冬物衣料の高値出回りやガソリンの値上げから+1.1%と上昇したが、前年比では、前年が台風の影響で大幅上昇をみたこともあって+0.7%にとどまった(前月同+1.4%)。

公社債市況は強調

9月の金融市場をみると、銀行券の還収超幅は69億円と前年(同1,375億円)を下回り、月中平均発行残高(前年比)は+4.9%と前月(+4.8%)を幾分上回った。一方財政資金は、国債発行額が前年を上回ったものの、一般財政の払超幅が前年比拡大し、また外為会計が前年とは様変りに払超となったため、全体では9,488億円の揚超と前年(同10,701億円)を下回る揚超幅にとどまった。この結果、月中の資金不足は9,556億円(前年同9,655億円)となり、日本銀行は買入手形や貸出の実行等によってこれを調整した。

この間、コールレート(無条件物)は、上記のような資金不足地合を反映して月中+0.0625%上昇して6.5%で越月した。一方手形レート(2ヵ月物)は月初強含んだものの、その後反落し、結局月中横ばいとなった(月末水準6.75%)。

8月のマネーサプライ(M₂+CD平残、前年比)は+6.9%と前月(+7.1%)に続き低下した。この間、8月の銀行貸出約定平均金利(都銀、地銀、相銀平均)は、資金需要の低調を背景に長期、短期とも下落を続け、月中では0.006%の低下となった(月末水準7.086%)。

9月の公社債市況は、米国金利先高感の後退や円相場の堅調に加え、国債組み入れ金融商品の発売等による需給地合の好転もあってほぼ通月強調に推移し、これを受けて10月発行長期国債の応募者利回りの引下げが決定した(引下げ後利回り7.902%)。この間株式市況は、NY株価や円相場の堅調を背景に続伸した(東証株価指数月末691.08、月中+12.55)。

為替相場は円高化

8月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、貿易外収支の赤字幅が拡大したものの、輸出の著増から貿易収支の黒字幅を拡大したため、20.5億ドルと前月(21.2億ドル)に引続き大幅黒字を計上した。一方長期資本収支は、

本邦資本が対外証券投資を中心に大幅流出超を続けた上、外国資本の流入も縮小したため、19.3億ドルと赤字幅を拡大した(前月同18.0億ドル)。この間、総合収支は0.3億ドルの赤字となった。

8月の輸出(通関、ドルベース)は、前月減少のあと+4.2%と大幅に増加した(数量ベース+3.2%)。品目別(数量ベース)にみると、自動車、合繊糸、テレビが反動減を示したほかはほぼ軒並みに増加し、中でも鉄鋼、テープレコーダー、船舶、合繊織物が大幅に増加した。

8月の輸入(通関、ドルベース)は、前月大幅減少のあと、石炭、石油製品の増加を主因に+4.4%とかなりの増加を示した(数量ベース+6.0%)。

なお、9月の輸出および輸入(通関、ドルベース)は、それぞれ-1.3%、+8.7%となった(数量ベースでは-2.7%、+7.5%)。

9月の円相場(対米ドル直物相場)は、米国金利先高感の後退を背景に月中を通じて堅調に推移し、236円10銭で越月した(月中10円65銭の円高)。

(昭和58年10月14日)